

丹沢の夜の野生動物 ―センサーカメラが写しだした生態―

わかしろあきみち
若代彰路 (外来研究員)

2006 年より西丹沢^{にしたんざわ}において、主として小型哺乳類^{せうにゅうりゅう}の生態調査^{せいざい}を行っています。小型哺乳類の多くは夜行性のため、その生態を観察するのはとても難しく、研究者はいろいろと工夫しながら観察を続けています。その一つとして、動物の体温や動きに反応してシャッターがおりる赤外線センサーカメラ(図 2 右上参照)を多数取り付け、動物の生態を記録することになりました。

現在西丹沢では、生息する動物の種類と数が比較的多くかつ生息環境が豊かなところ 14 カ所を選んで、センサーカメラを設置しています。フィルムカメラを使用しているので、1 週間もしくは 2 週間に 1 度現地に行ってフィルムを交換します。フィルム 1 本(27～36 枚撮り)当たり、短い時には 3 日分、長い時には 2 週間分のショットがとれます。撮影期間は、長いものは 3 年以上、短いものでも半年以上です。

このように長期間にわたって、いろいろな環境にやってくる小型哺乳類の様子を観察した結果、これまでほとんど分からなかった小型哺乳類の生態が少しずつ明らかになってきました。

今回は、2009 年の夏から秋にかけて

センサーカメラがとらえた画像を編集・合成し、特別な写真を何枚か作ってみましたので、紹介します。

自動撮影は定点観察しているのと同じで、一つの場所で(一つの背景で)数種類の動物の写真が撮影されます。そこで、違った日あるいは違った時刻に写った動物をそれぞれ切り出して一枚の写真にまとめれば、どんな動物がやってきたのか、何をしているのか、なぜ来たのかなどを、一目瞭然で表現することができます。なお、どの動物も撮影日時は異なりますが、一部を除いて、写真の中での位置はほとんど変えていません。

画像の編集には、かなり時間がかかりましたが、できあがったものには、たくさんの情報が盛り込まれています。例えば、リスの引っ越しの写真が 8 枚撮影できました。その内の 5 枚を 1 枚にまとめたのが下の図 1 です。親リスが巣材を運び、3 頭の仔リスを口にくわえたり、腰にしがみつかせて疾走する様子がよく分かります。

ヤマネ、ヒミズ、ジネズミやネズミの仲間は小さいので、よく見て探していただきたいと思います。それでは、動物写真ショーのはじまりです。

第 1 話：リスの引っ越し(図 1)

ある夜の写真に、リス親子の引っ越しのシーンが写っていました。

親リスはまず巣材と食料を新しい巣に運び、仔リスたちを迎える準備を整えてから、大急ぎで駆け戻ります。親リスは 1 頭、もう 1 頭と仔リスを口にくわえて新しい巣と古い巣を行ったり来たりします。3 頭の仔リスのうちの最後の 1 頭は腰にしがみついて運ばれました。

補食者の目をかすめての引っ越しですから、親リスは巣に残した仔リスが心配でしかたがないのでしょう。撮影時刻から推定すると、新しい巣は今までの巣から 7～8 分走ったところにあるようです。

新しい巣から戻る途中の親リス(一番左)の右前足にくっついているのは、裸子植物の球果の種子だと思えます。リスはこのようにして森の植物の種子の分散にも協力しているのです。

第 2 話：冬に備えて(図 2)

この写真がとられた木には、樹洞ができています。樹洞の開口部にあたる地上付近には、たくさんの動物が集まってきました。

球果を口にくわえた、冬毛のリスが樹



図 1 リスの引っ越し(合成写真)。(中央左から)親リス 1 頭、仔リスを口にくわえた親リス 2 頭、親リス 1 頭。(右上)仔リスを腰に乗せた親リス 1 頭。合成写真のため親リスはすべて同一個体。



図2 樹洞に集まってきた動物（合成写真）。冬毛のリス3頭、夏毛のリス2頭、スミスネズミ4頭、ヒメネズミ1頭、ヤマネ3頭。

洞にやってきました（中央やや右下）。このリスは球果を樹洞の入り口付近に置いた後、樹洞の中に入ったり、その周りを駆け回ったりしていました。その後、赤茶色の夏毛のリスも球果をくわえて来ましたが（左上）、先客の置いた球果を見てか、ほかの所に持っていったようです。リスは、球果やドングリやクルミをこのような樹洞の根元や穴の中などにためこみます。このような貯食によって、リスは冬の食べ物を確保しているのです。

この樹洞にはリスだけでなく、ヤマネ、スミスネズミ、ヒメネズミなどがやってきていました。時には彼らを捕食するためにテンも訪問します。スミスネズミやヒメネズミは樹洞の地面に巣穴を掘って住みついています。彼らにとって樹洞は格好の隠れ場所になるのでしょう。背中に黒い線のある動物はヤマネです。ヤマネは木の幹にぴったりとはりついて、何か

食べているようでした。幹についたコケをこそげおとして、集めて、繁殖のための球巣を作るのかもしれません。

夜の森はシーンと静まり返っているようですが、その暗がりの中で、樹洞のある木にはたくさんの動物たちが次々に集まっています。何だか不思議な感じがしませんか。

第3話：モモンガ出動！！（図3）

この写真は、樹洞のある木の根元を高いところからとらえています。木の幹を移動する動物だけでなく、樹洞の根元で活動する動物の姿もとらえることができるようにカメラの位置を工夫したためです。

モモンガはムササビと同じく皮膜を使って、樹間を移動するリス科の動物です。普段は、捕食者の目を逃れて樹上の高いところで生活しているため、野生のモモンガを見る機会はほとんどありません。

この写真のように、地上に近いところまで下りてくるモモンガの姿はとても珍しいといえます。

モモンガは、木の陰から樹洞の中をじっとうかがっています。樹洞の中やまわりに捕食者がいないか、しっかり確認しているのでしょうか。この樹洞の奥にはカマドウマがたくさんいます。モモンガの目当てはそれかもしれませんね。さていよいよ出動かな？

第4話：白いヤマネ発見？！（図4）

ヤマネは樹洞が好きようです。エサの昆虫がいて、昼寝にもよい場所なのでしょう。この樹洞に白っぽい動物がやってきました。樹洞上部とその左の茂みの中に見えます。背中に黒い線が見えること、樹上性であることおよび体型がヤマネによく似ていることから、この動物はヤマネ（成獣）と推定しました。体色が白っぽいのはストロボ光の反射によるものと考えられましたが、数日前と数日後に、同じ場所で茶色のヤマネがちゃんと写っていたので、このヤマネの体色は白と判断しました。アルビノ（色素欠乏個体）といえるものではありませんが、かなり白っぽく驚いています。このような色だと、天敵に見つかりやすく、捕食されやすいので、この個体のように大人にまで成長することは珍しいのではないのでしょうか。ヤマネの体毛の色の変異がどの程度あるのか、この地域だけなのか、性別などとも関係するのかなど、興味はつきません。今後もっと観察したいものです。

謝辞

本稿の写真の現像に当たっては、（有）田中写真から多大なご協力を戴きました。厚く御礼申し上げます。



図3 樹洞の中をうかがうモモンガ（右に2頭）（合成写真）。



図4 樹洞にやってきたヤマネ（合成写真）。白ヤマネ2頭（右上および中央上）、茶色ヤマネ1頭（右上端）、ヒメズ2頭（1頭は茂みの中）、ジネズミ1頭。